果樹特報

No.9

平成 30 年 7 月 20 日
ＪＡ中野市営農センター
ＪＡ中野市りんご・もも部会

7 月中旬の異常高温でハダニ類が急増中です。特にこの時期は、散布前の徒長枝切除・下草刈り等は入念に実施し、薬液が通りやすい環境を整えてください。加えて、しばらく高温・少雨が続くため、シンクイムシ類・カメムシ類の加害が増加することが懸念されます。ついては、盛夏期の散布は予定より前倒しで実施してください。

りんご　8 月上旬の薬剤散布（前回より 15 日後）

◆ 散布日：8 月　　日
◆ 散布量：　　リットル

散布時期：8 月 1 日～5 日

散布薬剤：

水	100 リットル		
展着剤	10ml	＊注意事項①参照	
コロマイト乳剤	100ml	（前日、1 回）	
エクシレルＳＥ	20ml	（前日、3 回）	＊注意事項②参照
ダイパワー水和剤	100g	（前日、3 回）	＊注意事項③参照

散　布　量：10a 当り　600 リットル

対象病害虫：輪紋病、炭疽病、斑点落葉病、褐斑病

ハダニ類、シンクイムシ類、ハマキムシ類、キンモンホソガ

【注意事項】

① 通常展着剤（ハイテンパワー等）に代えて、機能性展着剤のササラの 2,000 倍（100 ﾘｯﾄﾙに 50ml）を使用すると薬液が葉裏（毛じ間）に広がりがよくなり、散布後の乾きも早くなる効果がある。（殺虫剤との相乗効果）

② シンクイムシ類・カメムシ類対策：エクシレル SE に代えて、バリアード顆粒水和剤 2,000 倍（前日、3 回）を使用してもよい。尚、バリアード顆粒水和剤は劇物登録のため、購入の際は印鑑をお持ちください。

③ **ダイパワー水和剤の使用前規制が 7/3 付けで前日に登録変更されました。尚、ダイパワー水和剤・ベフラン液剤に含まれる有効成分（イミノクタジン）の使用は開花期以降は年間 3 回までです。使用超過に注意ください。**　＊ベフラン液剤は晩生種中心に 9 月中旬・10 月初旬に散布予定です。

④ 褐斑病対策：ベンレート水和剤 3,000 倍（前日、4 回）を加用する。

⑤ 園地の外周等死角がないように、散布量は多めに設定する。また、薬液が樹内部まで到達するように散布前に徒長枝切りや支柱立て等も積極的に実施する。

◆ 次回（8 月中下旬）薬剤散布予定：8/15～20
お盆後のハダニ類・シンクイムシ類の重要防除

りんご早生種の栽培管理は次ページをご覧くださ

1.　つがる等の着色管理について

①　**日焼け果防止対策**：果実温の高い日中に作業を行い、早朝や夕方、果実温の低い時間帯には行わない。

②　徒長枝切りや枝つり、支柱立てを早めに行い樹冠内部への光の導入を図る。

③　葉摘み：収穫の 7 日前位（8/20 前後）から始める　⇒　日焼けを助長するため、あまり早期に実施しない

- １回目：日焼けに注意しながら、果実に密着している果そう葉を中心とした軽い葉摘みを行う。
- ２回目：着色の様子を見ながら玉回しと合せて実施する。（収穫直前頃）

④　一度に強い葉摘みを行うと、日焼け果の発生を助長するので注意する。

⑤　玉回し：果実が 30%程度着色したら 1 回目を実施　⇒　その後に収穫直前頃の葉摘みと併せて 2 回目を実施する。

⑥　直射日光の当たる部分の葉摘み、玉回しは実施しない。

【収穫時の注意】

①　着色のみではなく尻部の地色の抜け具合も注意する。つがるの収穫は高温時であるため、過熟果の発生がないよう熟度を考慮しながら行う　⇒　着色ではなく鮮度重視とする

②　同一の樹のなかでも果実により熟度の差があるので、数回に分けて収穫する。

③　鮮度保持対策：日中の高温時の収穫は出来るだけ避ける。収穫した果実は日陰などの涼しい場所に保管する。

【潅水・土壌管理】

①　高温・干ばつにより土壌水分の蒸散が激しい時期なので早めに潅水を行い園地内湿度を一定に保つ。尚、雨が 5 日以上ない場合は、1 回のかん水量を 20～35mm 目安に実施する。

②　水分不足は果実肥大に影響し、水分ストレスはつる割れ果等の発生を助長する恐れがあるので注意する。

2.　つがる等の落果防止剤の散布について

①　対象品種：つがる

②　使用薬剤：ストッポール液剤

③　使用時期：収穫開始予定の 25～7 日前（2 回以内）

④　使用倍率：**1,500 倍**　⇒　水 100 ㍑に 66ml・展着剤は加用しない

⑤　散布量：500～600 ㍑／10a

⑥　散布時期：収穫開始予定の 15 日前に 1 回散布処理

- **目安：8/1～5 頃**
- 収穫前規制のため、収穫開始は散布後 7 日間経過後とする

◆　散布にあたっての注意事項

①　**展着剤は加用しない**。

②　**単用散布を厳守する**　⇒　他剤との混用は絶対にしない。

③　**乾燥条件下では効果が低減するので、定期的なかん水を行い、園地内の湿度を上げる等の対策を図る**。

④　他品目、特に野菜等に飛散しないように注意する　⇒　生育障害･薬害発生の恐れあり

⑤　落果防止剤を散布すると熟度が早まり、果肉軟化を助長しやすいので、過熟果発生に注意して収獲を進める。